熊本地域医療センターだより

院長　清住雄昭

令和元年(2019年) 7月発行

熊本地域医療センター電話番号(代表) 096-363-3311　FAX 096-362-0222

2019 7 月号　通算170号

熊本地域医療センター理念

かかってよかった。
紹介してよかった。
働いてよかった。
そんな病院をめざします。

CONTENTS

2面　多職種連携・チーム医療

3面　消防訓練　院内感染対策研修会

4面　メンタルヘルスケア

まだまだ続けます、熊本方式!

小児科出動協力医調整協議委員会　杉之原　佳子
(さくらんぼこどもクリニック院長)

熊本市の夜間・休日小児初期救急医療体制「熊本方式」誕生から37年が経ちました。1981年、熊本市の委託により熊本地域医療センター医師会病院開院とともに始まったこの事業は、熊本市と近郊の開業医・大学医局員・医師会病院勤務医による「三位一体」の出動医協力体制で運営されています。 24時間、365日、いつでも小児科医の診療が受けられるというこの制度は設立当初から続けられており、今ではすっかり熊本に定着しています。しかしその運営には様々な問題があり、関係者のたゆまぬ努力と協力により継続できているという状況が続いています。特にこの数年は本制度の行く末を案じる声が内外から聞こえてくるようになりました。協力する開業医の高齢化が進み、出動医が減少し体制維持が困難になると予想されているからです。

実際に現在の出動開業医43名の平均年齢は59歳で、2017～19年度に出務定年である70歳を迎えた医師が６名いました。加えて自身の体調不良等のために出動できなくなった医師もいて、協力開業医の減少は予想以上のペースで進んでいます。一方、この３年間で新たに協力医となった新規開業医は３名に留まりました。このような状況の中で、緒方健一前委員長の号令により、我々が目指したのは協力医確保と出動しやすい環境作りでした。

2015年春、熊大医局関連の小児科医が一堂に会した「熊本市の小児科診療の連携を考える会」では大学以外の関連病院に出動協力を要請する方針が決まり、同年秋から若手勤務医の出動が始まりました（熊本市内３病院。今年は玉名からも参加）。さらに大学小児科からも、研究に臨床にと多忙な中でも積極的に出務してくれる頼もしい若手医師達が増えています。医局員の出務を理解し配慮してくださる中村公俊教授をはじめ、自らも出動協力しつつ若手医師を支えていただく大学小児科医の皆様に感謝いたします。

若手医師の出動が増えたことと、医師会病院の小児科常勤医が深夜出動も担当してくれることで、開業医は全員日勤と準夜のみの出務となり、昨今の個人主義の台頭もあって生じていた一部医師への負担はほぼ解消されました。また常勤医には日勤帯の激務の後も院内待機していただいて、初期救急のバックアップ(診断困難例や重症者への対応)を即時にお願いできますから、出動医は安心して出務できます。(ありがとうございます!)。

さらに、医師会病院スタッフによる救急外来環境整備は出動医だけでなく受療者側にも大きな変化をもたらしています。看護師によるトリアージは患児・保護者に「安心な待ち時間」を保障し、インフルエンザ迅速検査実施適応の説明文掲示は混迷を極めていた冬場の待合室に秩序を生み、診療内容以外の苦情に出動医

2面に続く ►

が対応することは無くなりました。おかげで先日の大型連休でさえ混乱なく無事終了することができました。

私のような開業医にとって熊本方式は、グループ診療による救急医療業務を分担することで個々の時間的・労力的・精神的負担を軽減できる有難い制度です。子(孤)育てに小児科医みんなで寄り添い社会へ貢献できる機会でもあります。こどもたちに最善の救急医療を提供できる日が来るまでは、現存する医療資源で可能な無理のないレベルに事業内容を集約し熊本方式を維持していかなければならないと考えています。

最後に、医療経済的には不採算性の高い小児科を基幹病院が次々と閉鎖していく中、積極的に支援してくださる医師会会員・医師会病院の皆さまに、将来を担う子供達に代わってお礼申し上げます。

「多職種連携・チーム医療」

～第2回：医療安全管理部の取組み～

医療安全推進部：セーフティーマネージャー　清水　深

前稿(１月号)より「多職種連携・チーム医療」をテーマに連載が開始となり初回緩和ケアチームに続き第２回は医療安全推進部門の取組み紹介です。

医療安全に関連した多職種連携の事始めは平成19年４月に施行された第５次医療法改正による〝医療安全の確保〟が法制化されたことに遡り、感染対策と並び古株です。医療安全管理部門は「診療部門、薬剤部門、看護部門、事務部門等の全ての部門の専任の職員が配置されていること」と規定され、そのような委員会構成は多職種・連携チームの典型的な様相を呈しています。しかし患者安全管理部門も含め次稿以降も続々と〇〇チームが登壇・紹介となる予定ですが、このように全国的にチーム医療やタスクシフトが推進されているなか、一方においてはこのチームとしての協働・連携がうまく機能せず医療事故が発生している事実が多くあることは皮肉な話しです。

そもそもチーム医療とは何ですか？グループや集団と何が違うの？多職種でラウンドや治療・検査することがチーム？スポーツは必ずチームで練習をするが医療者はなぜしないの（親子・夫婦・カップルでも阿吽の呼吸は難しいのに！？…）。ではチームで何ができればよいのか？など数々の疑問が湧いてきます。患者安全部門自身も毎月の委員会や年２回の全体ラウンド、施設間ラウンドなど多職種・多施設で活動しつつ、平行して全職員がこうした疑問に気付きチームとして協働できるようチームトレーニングを導入しています。

トレーニング方法、枠組みはいくつかありますがそのうち広く活用されている〝チームSTEPPS〟を研修では用います。まだまだ不十分な取組みで普及途上ではありますがチーム医療が進めば進むほどチームとしてよりよい環境で働けるよう、かつ結果として最終的には患者安全、医療安全文化の向上につながること期待しつつ地道に多職種連携・チーム医療を推進させていきたいと思います。

トレーニングのご希望もお気軽にお寄せください。

消防訓練を行いました

主任看護師　杉本　理恵

2019年５月22日、今年度１回目の消防訓練を実施しました。本訓練は年２回の実施が義務付けられた訓練で、実践をイメージし緊迫した空気の中で臨みました。

今回参加したスタッフの多くは熊本地震の際には学生であったスタッフがほとんどで、病院の被災状況を経験していないからこそ、緊張感を再現し、日ごろから有事に備える重要性を考える機会となることも兼ねて臨みました。

今回は夜間を想定した火災発生であり、火元は病室でした。初期消火の失敗の合図を受け、まず病室に近い患者を優先した避難誘導、担送患者のもとへ人を集めた上での搬送、避難誘導確完了報告までの訓練でした。夜間帯という限られた資源をいかに有効活用し、優先度を瞬時に判断し、患者さんそして自分たちの安全を担保するかが重要です。そのために互いにコミュニケーションを図り、全職員で連携を図ることが大切であり、日ごろから有事に備え、自分の役割を理解し行動できるようイメージしておくこと、また、多職種との連携の必要性を考えるきっかけとなりました。

当院の災害対策委員会では今年度全部門のアクションカード作成を目指しており、各部門との協働でアクションカードを用いた訓練を委員会として企画したいと思っています。

院内感染対策研修会を開催しました

「正しい廃棄物の処理、針刺し・切創、皮膚粘膜曝露事故発生時の対応」

感染管理認定看護師　田上　誠

令和元年第１回目の感染対策研修会を行いました。自分達が働く中で排出された「廃棄物」が、どのような過程を経て処理されるのか、どのような「責任」があるのか、サンレイメディカルの方をお招きして講義をして頂きました。病院から排出される廃棄物は、「産業廃棄物」であり、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃棄物処理法）」によって厳しく規制されています。当院では感染性廃棄物容器の蓋や周囲に、この容器には何を捨ててよいかを提示し、正しく分別できる取り組みをしています。本来紙おむつも感染性廃棄物として処理しなければなりませんが、血液付着がないものや明らかな感染症がないものに関しては、熊本市の場合事業系一般廃棄物として廃棄することができます。熊本市の一般廃棄物処理施設は他の市町村と比較し、処理能力に優れているからだそうです。感染性廃棄物に関しましては、当院の感染性廃棄物は鹿児島で焼却され、1/10程度の量にされた後で宮崎に埋め立てられます。なぜ熊本で処理しないのか？と思われるかもしれませんが、熊本の処理場は、ダイオキシンの濃度が基準値を超え閉鎖され、他県に最終処理を委託している状況です。廃棄物を全て感染性廃棄物とするのではなく、一般廃棄物として分別できるものは正しく分別し、感染性廃棄物の量を減少させることは、今後の地球環境を保護する意味でも重要な取り組みだと思います。

今回正しい廃棄物処理に関連して針刺し等曝露事故後の正しい対応を再確認しました。針など鋭利なものを一般廃棄物に捨てたり、貫通性の無い容器に廃棄することで、第三者が針刺しや感染物による曝露のリスクにさらされます。正しい分別は、そういった二次感染を防ぐためにも重要な取り組みであることを再確認しました。

会員の先生方の施設でも廃棄物処理や感染対策に関する内容や研修等でお困りのことがあれば、いつでも声をかけてください。

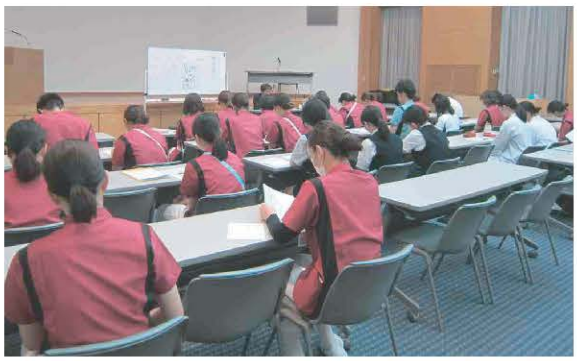
「メンタルヘルスケア」研修会を開催しました。

主任看護師　斎藤　希・黒木　葉子

５月23日、新入職看護師を対象に、「メンタルヘルスに役立つコミュニケーション」の研修会を開催しました。毎年お世話になっている熊本心理カウンセリングセンターの岡崎光洋先生にご講演いただきました。上記テーマは、健康な職場づくりにつながるため、公開研修として院内各部署の新入職員ならびに熊本市医師会事業部門の新入職員も一緒に参加しました。

入職後２ヶ月が経過し社会人として歩み始めた新入職員は、期待と緊張の中で思うように仕事ができずに落胆や行き詰まりを感じる頃です。今回、対人コミュニケーションにおける楽になるヒントとして、〝困難は分割する〟〝まぁいいか・なるごつなる・できるしこ〟などのアドバイスを頂きました。新入職員がこれから先、しなやかで折れない心をもって困難を乗り越えていくことを期待しています。

今年度、私たち看護部は、2019年度の看護部目標を先読みの看護「一つ屋根の下にいる患者さんを皆で看る」と掲げています。後輩育成も同様に〝一つ屋根の下で皆で育てる〟を合言葉に、2020年春に新入職看護師全員が２年目を迎えることができるよう大切に育てていきます。



次回の 熊本地域医療センター勉強会 のお知らせ

日時／7 月22日（月）　19時開始

場所／熊本地域医療センター２階　多目的ルーム

呼吸器内科 坂本 一比古先生

「外来にて悩む咳嗽診断のポイント」

CC 46: 咳・痰

院　長:清住　雄昭　発行責任者:地域医療連携室長　柳 文治
熊本地域医療センター　〒860-0811　熊本市中央区本荘5-16-10
TEL(代表)096-363-3311/FAX 096-362-0222
TEL(直通)096-366-1323/FAX 096-363-3416
E-mail:renkei@krmc.or.jp
ホームページアドレス:http://krmc.or.jp

編集後記

Y@今月号は、小児科出動協力医調整協議委員長になられた杉之原先生に小児初期救急医療体制「熊本方式」について書いていただきました。まだまだ続けます、熊本方式！　自治体としての熊本市の魅力の一つでもあると行政も認識されていました。当院の最も重要な特長の一つであります。ご協力いただいている皆様に感謝いたします。

S@今回で170号となったセンターだより。先日、記念すべき2号を見つけました！(1号は見当たらず…)バックナンバーをご覧になりたい方は地域医療連携室までご連絡ください(*ˆ ˆ*)